

魯迅『野草』の掲載誌『語絲』について

——「愛知県立大学」所蔵“原本”の発見

秋吉 收

論文摘要：魯迅が『野草』を連載（1924年～27年）し、周氏兄弟を始めとした重要な文人が集った雑誌『語絲』（1924年11月～27年11月【北京出版：孫伏園・周作人編】、1927年12月～1930年3月【上海出版：魯迅・柔石等編】）は、『新青年』に比肩する必須文献として利用されてきたが、近年（特に中国国内で）は例に違わず、オンライン上（無料で）入手できる「電子版」を使用する研究者がほとんどという状況にある。今回、魯迅「我和『語絲』的始終」（1929年12月筆、『三閑集』所収）辺りからその周囲を改めて紐解き、各地に散在する版本を検証してその刊行状況を可能な限り明らかにし、正確な『語絲』テキスト使用への縁としたい。

キーワード：『語絲』、魯迅、周作人、「合訂本」、「愛知県立大学」蔵本

1. 『野草・影的告别』「住」と「往」

まずは「影的告别」の冒頭部分を引用する（原載誌『語絲』ではなく、2005年版『魯迅全集』に拠る）。

人睡到不知道时候的时候，就会有影来告别，说出那些话——

有所不乐意的在天堂里，我不愿去；有所不乐意的在地狱里，我不

愿去；有我所不乐意的在你们将来的黄金世界里，我不愿去。

然而你就是我所不乐意的。

朋友，我不想跟随你了，我不愿住。

我不愿意！

呜呼呜呼，我不愿意，我不如彷徨于无地^[1]。

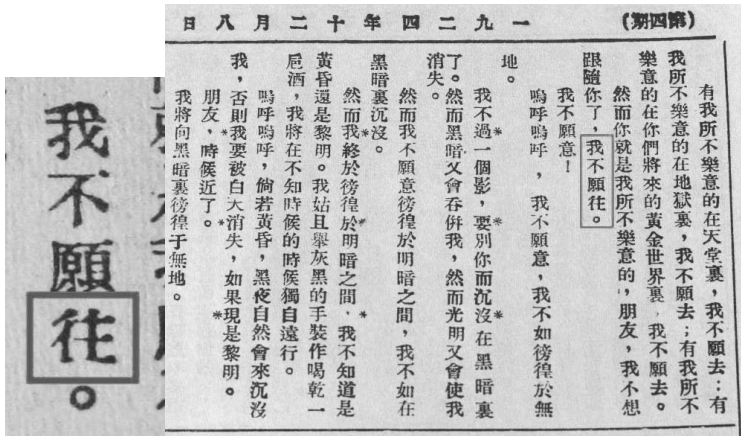
(太字、下線等は引用者による。以下同じ)

この部分について、以前の拙稿で筆者は次のように書いた。

「影的告别」は、1924年12月8日『語絲』第4期に初めて掲載されるが、この原載誌の当該部分を確認すると、驚くべきことに、これまで見てきた「朋友，我不想跟随你了，我不愿“住”。」の「住」は「往」となっている（「大安」版^[2]）。つまり、「友よ、僕はもう君について行きたくなくなった、僕は行きたくない（我不愿“往”）」となっているのだ。

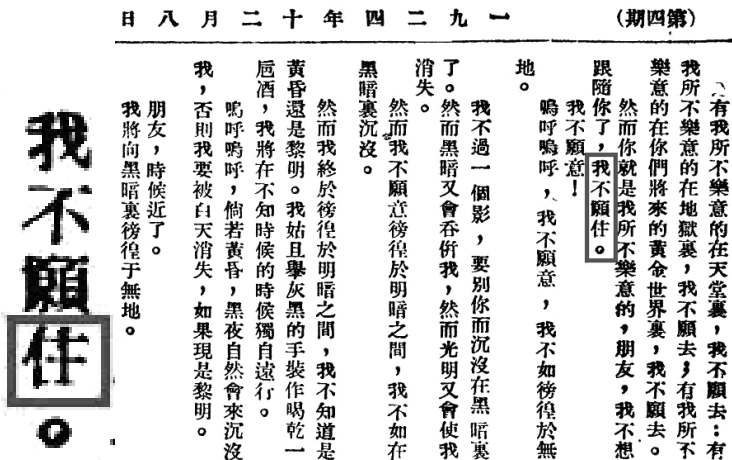
この異同については、管見の及ぶ限り従来の研究の中で指摘されたことはない。見てきたように数多の『野草』研究、翻訳に際して参照されるテキストはすべて「不愿“住”」に作る。可能性としては、明らかな誤植と判断され敢えて無視されたか、あるいは見落とされたかの両方が考えられるが、多くの研究は（或いは資料的制約から）原典の『語絲』にまで遡っていない、そもそも異同に気付いてはいないと考えられる。

また、「住」と「往」は字形が極めてよく似ており、1920年代の雑誌『語絲』に印刷された文字は小さい上に鮮明とは言えない状態で、見落としの可能性も十分にあり得よう。丸尾常喜氏の研究書『魯迅『野草』の研究』（1997）には、各篇の注釈の後に「校異」の欄が設けられ、初出誌『語絲』と1981年人民文学出版社版『魯迅全集』との異同を丹念に拾われているが、「往」と「住」の記載はない^[3]。



『語絲』第4期（「大安（影印）」版）

この問題について、抜き刷りをお送りした中国の研究仲間から、この部分が自分の見ている『語絲』では「往」になっているとの“驚き”の指摘を受けた。中国の研究者が一般的に使用している“オンライン流通”（電子）版『語絲』を早速確認してみると、確かに「往」でなく「住」になっている。



『語絲』第4期（「(オンライン) 電子版」より）

そして目を凝らして仔細に見ると、「往」と「住」の違いばかりでなくどうも印刷字体そのものが異なるし、行間の幅や記号の有無、枠外の刊行期日の配置等々、全般に亘って両者は大きく異なることに気付かされる。

「往」と「住」とどまらず、魯迅が『野草』に選択した原文が実際どうであったかの重要な問題とも絡んで、いまだ全く俎上に上ったことのない『語絲』の版本の詳細について、今回可能な限り徹底的な調査を行うに至った所以である。

2. 編者について：魯迅と周作人

魯迅は「我和“語絲”的始終——我所偶見的六個文學團體”之五一」（1930年2月1日『萌芽月刊』第1卷第2期）の中で、次のように述べている。

同我关系较为长久的，要算《语丝》了。（中略）——这回想要写一点下来的，是我从来没有受过晨报馆的压迫，也并不是和孙伏园先生两个人创办了《语丝》。这的创办，倒要归功于伏园一位的。那时伏园是《晨报副刊》的编辑，我是由他个人来约，投些稿件的人。

（中略）

当开办之际，努力确也可惊，那时做事的，伏园之外，我记得还有小峰和川島，都是乳毛还未褪尽的青年，自跑印刷局，自去校对，自叠报纸，还自己拿到大众聚集之处去兜售，（中略）但自己卖报的成绩，听说并不佳，一纸风行的，还是在几个学校，尤其是北京大学，尤其是第一院（文科）。理科次之。在法科，则不大有人顾问。倘若说，北京大学的法，政，经济科出身诸君中，绝少有《语丝》的影响，恐怕是不会很错的。至于对于《晨报》的影响，我不知道，但似乎也颇受些打击，曾经胜利者的笑容，笑着对我说道：“真好，他们竟不料踏在炸药上了！”（中略）

《语丝》的销路可只是增加起来，原定是撰稿者同时负担印费的，我付了十元之后，就不见再来收取了，因为收支已足相抵，后来并且有了赢余。（中略）

我和《语丝》的渊源和关系，就不过如此，虽然投稿时多时少。但这样地一直继续到我走出了北京。到那时候，我还不知道实际上是谁的编辑。（中略）不愿意在有权者的刀下，颂扬他的威权，并奚落其敌人来取媚，可以说，也是“语丝派”一种几乎共同的态度。所以《语丝》在北京虽然逃过了段祺瑞及其吧儿狗们的撕裂，但终究被“张大元帅”（張作霖：引用者注）所禁止了，发行的北新书局，且同时遭了封禁，其时是一九二七年。

这一年，小峰有一回到我的上海的寓居，提议《语丝》就要在上海印行，且嘱我担任做编辑。以关系而论，我是不应该推脱的。于是担任了。

『語絲』が上海に移った後に自分が主編者となったことを魯迅は明言するが、北京時代については「到那时候，我还不知道实际上是谁的编辑。」と魯迅らしい言い回しで（わざと）はぐらかしている。なぜなら、北京時代の主編は周作人であった^[4]。

例えば周作人は、当の『語絲』第18期（1925年3月18日）に「《语丝》编者启事」（署名周作人）と題する次のような文章を載せている。

《语丝》社草创未久，组织简陋，只有一位朋友（或者应说两位）兼管发稿校对及发行的事务，别无专任编辑的人。有些友人寄稿，叫我转交，我极愿意代收，但外来投稿还请直接寄给社里更为适宜，因为我不是主任的编辑人，虽然帮同看稿原是大家共同的任务。

还有好些寄作品来叫我批评的人，对于他们我也要声明一声请求原谅。我很感谢诸位这样的看重我，但我实在惭愧而且抱歉不能报答他们的期望^[5]。

ここもまた周作人らしい謙った言い回しで説明されるが、編集自体がこのようにやや曖昧なものであったことも事実であろう。ただ、周作人は北京時代の『語絲』に、合わせて17則の「編者按語」^[6]を寄せており、1925年11月23日『語

『語絲』第54期には「『語絲』的体裁」と題して、林語堂からの雑誌体裁（頁数や綴じ方）に関する質問に公開で答えるなど、主編者の風格を垣間見せてもいる。

ただ、魯迅がおそらくは周作人を意識して曖昧な表現をとったように、『語絲』に関しては周作人もまた同様に兄の魯迅を強く意識していた。後に、1957年10月3日『羊城晚報』掲載「《語絲》的回忆」（署名啓明）では、次のように書き付けている。

提及魯迅与正人君子的斗争，却以这为根据地，所以一说它的历史，也不是没有意义的事吧^[7]。

当時、周作人は漢奸として軟禁状態にあり、民族の英雄たる兄の魯迅を顕彰することに僅かに生存意義が与えられていた、そういう状況下での執筆であったが、北京と上海で同じく主編として関わった『語絲』を巡っても、二人の複雑な様相が垣間見られる。

さて、北京時代の『語絲』について、その出発と終結を周作人の日記の記載から跡付けることも可能である。

「周作人日記 一九二四年十一月二日」

下午往訪適之 又至開成北樓 同玄同 伏園 小峯 矛塵 紹原 頡剛 諸人
議刊小週刊事 定名曰語絲 大約十七日出版 晚八時散^[8]

「周作人日記 一九二七年 公歷十一月十九日補記四月至十二月日記。」

民國十六年

十月二十二日、北新書局因事停止營業、語絲停刊、一五四以後移交上海由北新接办。

九月中、以日本小説集“兩條血痕”及論文集“談龍集”予開明、先收

百元、以“談虎集”予北新書局^[9]。

こうして北京から上海へと場所を移し、主編も周作人から魯迅へとバトンタッチされることになるが、周作人がここに記す「一五四以後移交上海由北新接办」について、陳離著『凝望与置身—语丝社与《语丝》周刊』を借りて説明を加えたい。

由鲁迅主编的《语丝》第4卷第1期于1927年12月17日在上海出版。在北京出版的《语丝》只有期数，没有卷数，为什么首次在上海出版的《语丝》变成了第4卷第1期？这是因为《语丝》是周刊，按每年365天计算，《语丝》一年应出52期。北京版《语丝》是出完第154期后被查封的，但仍有编好的稿子未刊出来，于是在上海继续出了两期，即155期和156期。第156期正好相当于3年的总数，如果按一年一卷来算，正好3卷。所以鲁迅接手之后，于1927年12月17日新出版的《语丝》周刊便标明第4卷第1期，出完52期后，接下来出版的便算是第5卷了^[10]。

周作人は、『知堂回想録』（1970）「一四七 語絲的成立」の最後に、次のように書き付けていた。

关于语丝说了不少的空话，至于实在的文章如何，好在世间还有印本流传，只得请好事者自己去看了^[11]。

「好事者」がここにも一人。「印本」を探る旅へと歩を進めたい。

3. 『語絲』出版の実際

さて、今回の版本調査は、魯迅の『野草』の殆どが北京時代の『語絲』に発

表されたこともあり、まずは北京刊行版本の調査を中心に進めていく。なお、主たる対象が「版本」それ自体であるので、上述の編者等の出版体制等に加えて（従来の『語絲』研究はまさにそこに集中している^[12]が）、今回は特に具体的な出版の状況や「印刷」事情について可能な限り明らかにしたいと考えている。

次に引く章廷谦（1901—1981：字矛尘，筆名川島）^[13]の「憶魯迅先生和《語絲》」（『文芸報』1956年第16号）は、『語絲』の発刊当初から、“現場”に最も深く関わった当事者の一人として、魯迅の関与についての記述もさることながら、印刷や販売についての説明も詳しく、資料性が高い。

《語絲》创刊，比同时期在北平出版的《现代评论》和《猛进》两个周刊要早些，《語絲》第一期是在一九二四年十一月十七日出版的，是周刊，每星期一出版。开始只是一张八页十六开报纸的小型定期刊物，后来，过了一年多改成三十二开十六页的装订本^[14]。起初，只是在北京大学第一院新潮社做《語絲》的一个编辑、校对、发行的地方，并没有社址的，等次年北新书局成立，才由北新书局发行。（中略）在《語絲》第三期的中缝登过，说明“本刊由周作人、钱玄同、江绍原、林玉堂、鲁迅、川岛、斐君女士、王品青、衣萍、曙天女士、孙伏园、李小峰、淦女士、顾颉刚、春台、林兰女士等长期撰稿。”（中略）

十六个人长期撰稿只可以解决《語絲》稿子的问题；而经费呢，最低限度头几期的印刷费先不敢多印。可是少印呢，又因为排工的关系，成本就大，要影响售价。因之决定第一期印两千份，报价每份本埠售铜元四枚，外埠连邮费二分，全年一元。如果第一期印出以后，卖不掉那么些，就送人，以后少印。这是鲁迅先生的主意。当时在北京大学教学上需用的讲义而设的，也接受外活。（中略）

第一期印的两千份，出乎意料地在几天之内就卖完，而订阅者尤其是外埠的，仍不断地汇款来信订阅，记得《語絲》第一期就再版了七次，共印了

一万五千份。

《语丝》能有这么多的读者，是我们几个人在事先怎么也没有想到的，原先商定由我们几个人来分担印刷费的，只付了第一期的两千份印刷费之后，就毋须再来担负了。却也因为销路出乎意料的增多，编辑校对等工作，可由我们三个人照旧担任，发行工作就力所未逮；加之孙伏园出任《京报副刊》编辑工作，也有他自己的事了，即由李小峰另外找人帮忙。更因为销路的增多，不但每期毋须愁印刷费的付不出，而且有了盈余。（中略）

到一九二六年的下半年，鲁迅先生、伏园和我，先后到厦门去，《语丝》的一切事情，就偏劳了周作人先生和李小峰了。可是鲁迅先生虽远在厦门、广州，还是时常给《语丝》寄稿来的，和在京时一样的关切^[15]。

一九二七年十月二十四日，《语丝》在北京果然被张作霖政府封禁。在北京出版了整整三年，从一五六期以后移上海北新书局出版。（中略）一九二六年十月间，鲁迅先生正在厦门，一九二七年十月，先生刚由广州回到上海。（中略）于是在此后一年半的时间内，《语丝》的担子就推给鲁迅先生挑起来了。在鲁迅先生主编《语丝》的一年多时间当中，给了先生不少的折磨，曾拟停刊；到了一九二八年十月间由鲁迅先生约请柔石来任主编，编了不到半年，柔石就交还北新书局，之后就“废刊”了！

一九五六年八月三日，北京^[16]

『語絲』を巡る章川島と魯迅の關係の深さについて、まさに『語絲』上海移転當時に魯迅から彼に送られた手紙からも窺うことができる。

「270919 致章廷谦」

矛尘兄：久不得来信，大约你以为我早动身了，而岂知我至今尚九蒸九晒于二楼之上也哉！（中略）《语丝》的一四一，二两期，终于没有收到，大概没收了。（中略）北新出了一本《鲁迅在广东》，好些人向我来要，而我一

向不知道。关于出版界之所闻，大略如此^[17]。

ここには、張作霖によって発行禁止措置を受けた『語絲』の命脈に気を配るとともに、その出版社である北新書局（ひいては出版界全体）に対する魯迅の複雑な想いも記される。北新書局（そしてその“老板”李小峰）の関与についても、調査の必要がありそうだ。

次に引くのは孫伏園の回想「魯迅和当年北京的几个副刊」（《北京日报》1956年10月17日）である。孫伏園は章川島と共に『語絲』創刊に関わると共に、同時期に発行されていた『晨报副刊』『京報副刊』の主編を務めたことから、その言葉は注目される。章川島の回想での「第一期印的两千份，出乎意料地在几天之内就卖完，（中略）记得《语丝》第一期就再版了七次，共印了一万五千份。」と併せて参照したい。

《京报》听说我辞去了《晨报副刊》的职务，总编辑邵飘萍来找我办《京报副刊》。我觉得《京报》的发行数少（约三、四千份，《晨报》有将近一万份），社会地位也不如《晨报》，很不想去。但鲁迅先生却竭力主张我去《京报》，他说，一定要出一口气，非把《京报副刊》办好不可。一九二四年十二月五日，《京报副刊》就出版了^[18]。

孫伏園に関連して、ここにもう一つ荆有麟の「《莽原》時代」を引用する。よく知られる『語絲』創刊と孫伏園の『晨报副刊』辞職の経緯、加えて、この孫伏園と後に北新書局社長となる李小峰が、映画館の前に出店して『語絲』創刊号を売っていたなどの興味深い逸話が記されている。

《晨报》总编辑刘勉己，晚上不知为什么，去看了副刊的校样，他认为：《我的失恋》太不庄重。便不得伏园的同意，将《我的失恋》稿抽出来。（中

略) 伏园愤怒之下, 辞职了。为的是: 刘勉己剥脱了他的编辑权, 抽掉了鲁迅稿子。

于是, 《语丝》发刊了。

《语丝》的发刊, 完全由伏园的辞职而起, 由写文章的人, 每人拿出一部分钱, 作为印刷费。(中略) 记得在第一期发刊时, 伏园与李小峰, 还亲自抱着刊物, 在真光电影院门前发售呢。《语丝》一发刊, 伏园在《晨报》辞职的事, 被《京报》主人邵飘萍晓得了。便聘了伏园去, 为他编副刊。当时的《京报》, 以消息灵通见长。故在政界上很有势力, 但因编辑方法呆板, 又少学术空气, 所以在青年界, 没有引起注意, 可是伏园一进去, 情景便大不同了。当时报纸的销路增加, 连邵飘萍本人, 都为之吃惊, 他看出了文化的力量^[19]。

次に引用するのは、やはり章川島の回想文「説説『語絲』」(『文学評論』1962年第4期)である。

在《语丝》版样由原来的八页十六开报纸改成三十二开十六页的装订本之前, 于一九二五年八月、十二月, 一九二六年六月印行的从创刊起的《语丝》合订本上, 都印着“发行者”是“北京东城翠花胡同北新书局”, 尽管《语丝》上登载的地址还是新潮社。在北京翠花胡同时期的北新书局, 还只是一引“夫妻商店”的形式, 虽然《语丝》一切事务性的工作早就由北新经营, 这个“发行者”倒是李小峰^[20]志愿印上去的; 也许对这夫妻商店可以起些宣传作用吧, 大家并没有表示异议。 一九六二年七月十四, 北京。

本研究は「版本」調査にその中心を置く。実際に中国国内の殆どの研究者が使用するのが簡便なオンライン版であることは前述の通りで、研究者達から『語絲』に「版本」が存在することすら殆ど意識されたことはない状態にある。

だが実際にはその『語絲』「版本」の状況は複雑で、まずは大きく「原（刊本）」と「合訂本」とに分けることができる。ここで章川島はその「合訂本」に言及するが、管見の限り当事者の口から「合訂本」が直接挙げられる唯一の記述である。「合訂本」の出版状況の詳細を明らかにすることは至難に属する。それはひとえに商売であり、章川島の回想にあるように、意外にも極めてよく売れた「創刊号」は、7回も版を重ねた。そして発行後一定期間を経て、“二匹目のドジョウ”たる「合訂本」が出版されることになる。筆者の調査によれば、「合訂本」は一度ならず何度も出版されている。そして、現段階での調査結果を見る限り、それぞれの「合訂本」は「原刊本」と同じでないだけでなく、同じ号をまとめた「合訂本」それぞれの間でもどうやら版が（印刷如何が、引いては組版それ自体が）異なるようなのである。

現在、日本で見られる「合訂本」版本は、以下の通り。

A. 東京大学（大学院人文社会系研究科・文学部 図書室図書）系

- ・「東京大学 大学院人文社会系研究科・文学部 図書室図書」

1924-1927；1927-1929 / 1-156；4 (1-52)

- ・「東京大学 東洋文化研究所 図書室図書」

1926-1927CZY：530：b / 101-102, 104-107, 109-113, 115-120

- ・「東京都立大学 図書館中文」

1924-1927；1927-1928P/000/G69g / 1-100, 106-139, 141-156；4(14-26)

- ・「京都大学 文学研究科 図書館図」

1924-1927；1928-1929 雑誌 ||CK コ ||313 / 1-156；4

- ・「神戸大学 附属図書館 総合図書館 国際文化学図書館」

1924-1927；1927-1929920-52-Y / 1-156；4

- ・「東洋文庫」第1号（1924年11月）-156期（1927年11月26日），

4巻1期（1927年12月17日）-4巻52期（1929年）

・「東北大学 附属図書館本館」1926-1927 / 81-156

・「電子版（オンライン版）」

「凱希メディアサービス」『語絲』（全頁 PDF 画像、全文テキスト）

「百度網盤」など（筆者が見るのは『語絲』（2018年7月百度網盤））

B. 京都大学人文科学研究所（附属東アジア人文情報学研究センター）系

・「京都大学 人文科学研究所 図書室人情セ」

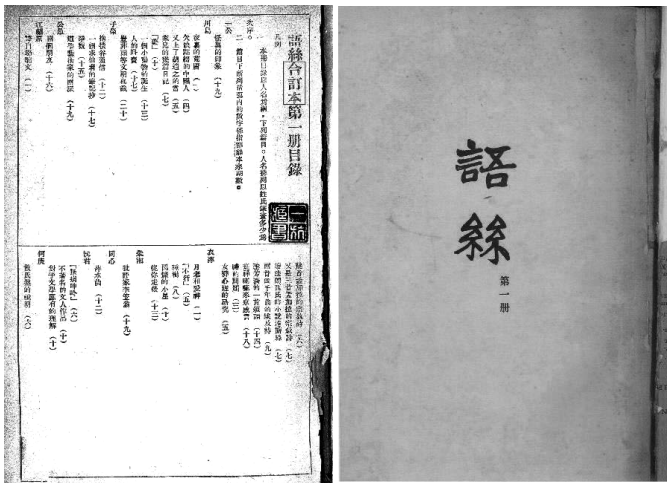
1924-1927920.5[G-315 / 1-95, 106-113, 115-139

・（「大安（影印本）」？）

※「未見」

・「大阪公立大学 杉本図書館」1927-1927 / 7（121-140）

・「富山大学 附属図書館図」1927-1929Z92[25 / 4.5



「東京大学文学部図書室」蔵書

本稿では、通行する『語絲』週刊には冒頭に挙げた「住」と「往」の違いにも明らかなように、確かに異なる版本とそれに伴う異なるテキストが存在すること、また「原本」に加えて「合訂本」が存在することを改めて確認すると共に、その「合訂本」にも一定の系列が認められる（上記の「A」「B」系列）ことをまずは示唆しておきたい。

「未見」の3大学図書館の所蔵本は『語絲』全体の一部であり、富山大については今回の対象たる北京刊行分は含まず、また大阪公立大と東北大学も北京刊行の後期の一部を所蔵するのみ。無論、最終的にはすべてを検証し、報告したいと考えている。

4. 『語絲』「影印本」について

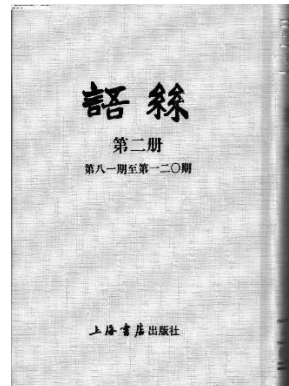
『語絲』には三種の「影印本」が出ている。最初に出版されたのは日本で、前掲「大安書店」1965 - 1966年発行の「中国資料叢書4『語絲（影印）第1 - 12冊』」である。この版本は現在調査継続中だが、かなり重要な意味を有すると考えている。

「影印本」残りの二種は中国国内で出版されたもの。「大安本」を除いては、現在実際に手に取って見られる『語絲』版本としては最もポピュラーなものとして、以下この二種について少し触れておきたい。

最初は、「1982年5月刊」、上海文芸出版社「中国现代文学史资料丛书（乙种）『語絲』（影印本）」である。「表紙カバー」に以下の説明が付される（書籍自体にはこの説明は附されていない）。

《语丝》影印本出版说明

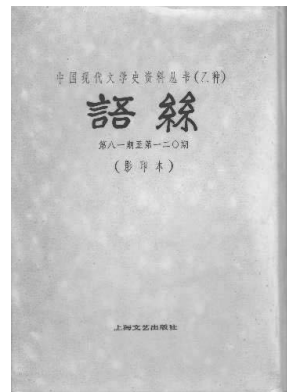
《语丝》系文艺性周刊。1924年11月17日在北京创刊，语丝社编辑、发行。1927年



10月因遭北洋军阀查禁而停刊。同年12月自第4卷起在上海复刊，由鲁迅主编，北新书局发行。1929年1月自第5卷第1期至第26期止，改由柔石编辑。同年9月自第5卷第27期起，由北新书局编辑。1930年3月出至第5卷第52期自动停刊，前后共出260期。《语丝》登载的作品大多为杂文、短论，对帝国主义、北洋军阀的反动统治和封建思想进行了猛烈的抨击。鲁迅曾在此发表杂文、小说和散文诗。本社现据原刊影印出版，共印三千部。为便于读者查阅，我们将原刊装订成十一册，并在每一装订册卷首增编了总目录。

「原刊」に拠るとあるが、筆者の見限り（詳細は別稿にて）、この版本は「合訂本」に基づく可能性が高いと考えている。また、もともと「合訂本」それぞれの分冊毎に附される「表紙・奥付」などの出版情報を、この版本はすべて削除してしまっており、数種存在する「合訂本」のいずれの版であるのか、そうした貴重な情報がすべて不明にされている。さらに「広告」やその他の「雑」部分もすべて切り捨てており、元の雑誌に付帯する当時の周辺記録も全く参照することができない。とにかく本文部分だけを残せばよいという方針は、中国国内で刊行される種々の「影印本」同様、（研究者の目からは）やや不便な編集であると言わざるを得ない。

また、ここに「在每一装订册卷首增编了总目录」とあるが、実は元の「合訂本」にもきちんと「総目録」が各冊巻頭に載っている。元の「第1冊：1 - 20期」「第2冊：21 - 40期」「第3冊：41 - 60期」「第4冊：61 - 80期」それぞれの目録を、この上海文芸「影印本」は、元の1から4冊をまとめて「第1冊：1 - 80期」として「総目録」に改編しているだけで、「出版説明」は正確とは



言い難い。

もう一種の「影印本」は、「2018年3月第一版（筆者の所蔵本は2019年6月第二次印刷）」、上海書店出版社『語絲（民國期刊集成）（全十一冊）』である。第二次印刷するほどなので、中国国内の多くの図書館に所蔵されるなどかなり売れていると見える。「出版説明」は次の通り。

出版説明

《語絲》一九二四年十一月在北京創刊，由語絲社編輯發行。一九二七年十月因遭北洋軍閥查禁而停刊。同年十二月自第四卷起在上海復刊，由魯迅主編，北新書局發行 本社按照原刊原寸影印出版，共十一冊。第一冊十六開，第二冊至第十一冊為三十二開。

此次根據原刊整理編目，影印出版。編制了全套期刊正文的頁碼，并在總目篇名下予以對應，方便讀者查閱。希望有利于史料文獻的積累保存，為研究人員與普通讀者提供閱讀參考。

やはり「原刊本」を丁寧に整理した「影印」版だと豪語するが、この「上海書店」本、実は前掲の「上海文芸」本をそのまま流用したものである。誌面を仔細に調べると、文字の相同だけでなく印刷の汚れなども「上海文芸」本を踏襲しており、おそらくは「合訂本」原本に遡ることもなく、「上海文芸」本をそのままもう一度コピーしたものと推察される。新機軸は、「各篇目録」を創刊号「第一期」から廃刊号の「第5巻第52期」全体に広げた（巻頭収録）ことのみである。最近の中国における出版物の例に違わずこの『語絲』1セットは極めて高価だが、「上海文芸」本とその価値は変わらないと判断される。

*

以上の「影印本」の他に、インターネット上に拡散される「電子版（オンライン版）」が存在し、現在多くの研究者がそれに拠ることは前述の通り。「電子

版」の正規版として日本で入手できるものに、「凱希メディアサービス」『語絲』（全頁 PDF 画像、Unicode 全文テキストファイル＋全文検索ソフト）がある。中国で作成されたこの「電子版」の編集方針は「上海文芸」「上海書店」と同様で、「表紙・奥付」「広告」などの貴重な出版情報をすべて削除した「“本文のみ” 版本」である。

現在までの調査で、この「凱希」版 PDF 画像は、「百度網盤」などで簡単に入手でき、おそらくは殆どの研究者が使用する「オンライン版」と同一のものであることがわかった。これも、上の「上海文芸」「上海書店」の双生児と同様、“印刷の汚れ”まで全く同じ版本である。全誌面について PDF 画像を作成するという手間のかかる作業を経た「電子版」は、同じ作業が二度と為されることはなく、瞬く間に拡散して普及すること自体、もちろん何ら異とするものではない。また、実はその版面は、東大系列の「合訂本」に属することも明らかになった（「合訂本」の詳細については別稿に譲りたい）。

ただ、「表紙・奥付」「広告」などを同様にすべて削除した「上海文芸＝上海書店」版と「電子版」は同じ版本であるかと思って仔細に調べたところ、興味深いことに、意外にもこの二つの版は全く異なるものであり、別種の「合訂本」に拠ったと考えられる。『語絲』の版本は、かように複雑なのである。

5. 「愛知県立大学」所蔵“原本”

CiNii（NII 学術情報ナビゲータ）にて国内大学図書館での雑誌『語絲』の所蔵情報を検索すると 4 種類の版本が表示される。『合訂本（北新書局 1925.8）』として「所蔵館 10 館」、『大安 1965.2-1966.2 影印』が「所蔵館 36 館」、『上海文芸出版社 1982.6- 合訂本』として「所蔵館 3 館」。そして最後に『北大一院新潮社, 1924』との記載だけ、つまり「合訂本」でなく雑誌「原本」所蔵と表示されるのが、以下 3 大学の図書館である。

1. 愛知県立大学 長久手キャンパス図書館 1924-1927P920-272 「1-140」
2. 京都大学 人文科学研究所 図書室人情セ 1927-1930920.5[G-315 「4-5」
3. 東京大学 総合図書館 1929-1929ZE : 229 「5 (42)」

まず「2」の京大人文研蔵本とは、本稿「第3章」で挙げた「B系列・合訂本」（北京刊行分）の続きの「4-5巻」つまり上海刊行分を指す（原本の所蔵について確認済）。次に「3」の東大「総合図書館」蔵本とは、やはり「第3章」で挙げた同じ東大の「A系列・合訂本」（東大「文学部図書室」蔵書）とは全く異なるものである。この「総合図書館」蔵書とは、まさにCiNiiの記載通り「第5巻第42期」一冊のみ原本が収蔵されている。このように、以上はすべて上海に移転して以後の発行分であり、今回取り上げた、魯迅が散文詩集『野草』を連載した北京刊行分の「原本」はこの時点でまだ所在不明のままである。

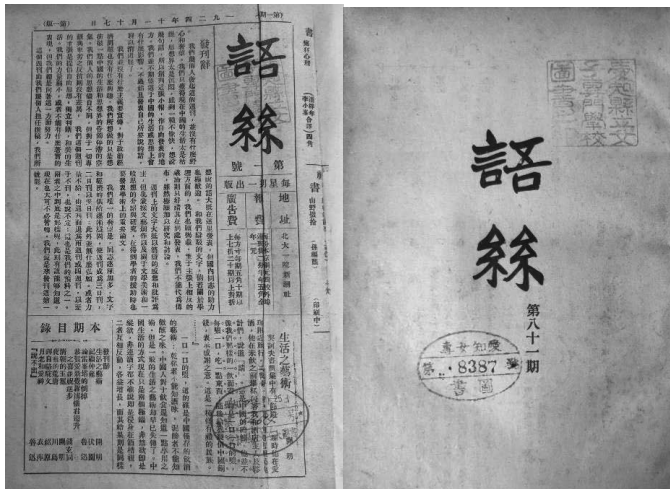
最後に残った「1」の「愛知県立大学」蔵本。本稿執筆のための調査期間中はあいにくのコロナ禍で、愛知県立大学図書館は学外者の利用を一切認めていなかった。しかしまさか本当に北京刊「原本」が「1-140期」まですべて揃っているはずもなく、おそらくはまた^[21]「合訂本」を「原本」と誤認しているのだろうと高を括っていたのが正直なところであった。今回、愛知県立大学名誉教授で『魯迅と西洋近代文芸思潮』（2008年、汲古書院）、『中国語圏における厨川白村現象』（2010年、思文閣出版）等の著書で知られる著名な魯迅研究者の工藤貴正先生に思い切ってお願ひしてみたところご快諾を得た（工藤先生にはこの場をお借りして深甚なる感謝を送ります）。先生が愛知県立大学の大学院生に託され、私からお願いした該図書館所蔵『語絲』の必要箇所について調査することができた。

その結果、「大」発見と相成った。この版本は予想に反して、「合訂本」ではなく正真正銘の『語絲』週刊“原本”であるとの結論を得たのである。北京刊

行本「1～156期」のうちその大部分「1～140期」の原本が、頁間の広告等“余計な部分”もすべて完全な形で残っている^[22]。少なくとも日本では北京刊行分の原本が確認できるのはこの愛知県立大学図書館のみであり、現地中国でも、オンライン検索の限り、北京の中国国家図書館や上海図書館蔵本も収蔵は「合訂本」のみである。僅かに「孔子旧書網」などの古書肆が、一冊ずつの断巻を極めて高価にて販売するのみ（筆者も『野草・影の告別』掲載「第4期」を購入した）。愛知県立大学の“揃い”の「原本」の貴重さが窺い知れる。

以下に、まずはこの極めて貴重な版本の書影を挙げておきたい。創刊「第1号」の第1頁（新聞形式の版型）と、「第81期」（単行本型へと移行後）の表紙である。

この版本はこれまで見てきた「3種の合訂本」とはその「版」自体が明らかに異なる。まず最初に気付くのは印刷（各活字の際立ち等々も含めて）が明らかに鮮明なことで、「原本」の版型を再利用した「合訂本」とは根本的に成り立ちが違う。また一冊一冊がそれぞれ単行本として出版されたものであるため



愛知県立大学（前身：愛知県立女子専門学校【国文科】1947-）蔵書

に、「合訂本」に見えるような「合訂本表紙」「各冊目録」「各冊毎の奥付」などは無論一切見られない。また印刷の誤りも少ないようだ(要継続調査)。(『野草・影的告别』の「我不愿“？”。」は「住」となっている。)

北京発行分(新聞形式の版型)について、原本が「合訂本」と大きく異なる(そして最も貴重な点の一つ)のは、そこに残された「頁間広告」である。第三章で引いた章廷謙の当事者としての貴重な証言「憶魯迅先生和《語絲》」(『文芸報』1956年第16号)には、次のようにあった。

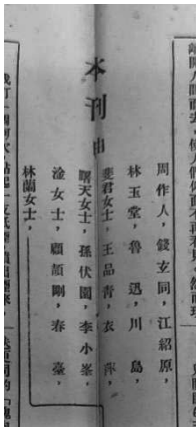
在《语丝》第三期的中缝登过，说明“本刊由周作人、钱玄同、江绍原、林玉堂、鲁迅、川岛、斐君女士、王品青、衣萍、曙天女士、孙伏园、李小峰、涂女士、顾颉刚、春台、林兰女士等长期撰稿。”(中略)十六个人长期撰稿

初期『語絲』を支えた投稿者が、ここに章廷謙の挙げる16名であることは『語絲』研究の基礎的認識であり『語絲』を語る時には多く言及されるが、「在《語絲》第三期的中缝登过」の部分は殆ど話題には上らない。なぜなら実際にこの「《語絲》第三期的中缝」を確認した研究者はおそらく(殆ど?)いないからだ。そのために、この16名の信憑性に対する疑義が提出されることになる^[23]。

「愛知県立大学」蔵本の「第3期」「中缝」つまり「頁の間」を見てみよう。

1924年12月1日「第3期」の「第3頁」と「第4頁」の「中缝」には、章廷謙の挙げる通りに、その順番も変わらず16名の名前が列記される。その後の経緯(ここに挙がる皆が必ずしも誌面に多く執筆したわけではない)から、この16名は決して『語絲』の中心ではないと否定する向きもあるが、少なくとも発刊当時において、『語絲』自身がこの16名を「長期撰稿」であることを宣言していることは、「原本」のここに明らかである。

このように、「原本」の発見は『語絲』の研究、延いては『語絲』に登載さ



れたあらゆる文章、執筆について、新たな事実、認識を提供する契機を孕んでいる。

筆者は、まずは魯迅や周作人に関する部分から、事実の解明に取り組んでいきたいと考えている。

*

ここでこの稀少な版本を保存していた「愛知県立大学」自身について少し調べておきたい。同大学のサイトには、その歴史について次のような説明が掲げられている。

愛知県立大学の源は、1947（昭和22）年に設置された愛知県立女子専門学校に遡ります。第二次世界大戦後の混乱の時代から立ち上がろうという県民の意欲が、国文科、英文科からなる女子専門学校の設置を促しました。その後、専門学校の女子短期大学への改組が行われる一方、1957（昭和32）年には4年制の愛知県立女子大学が設置され、両大学相まって、中部地方の女子高等教育の名門として優れた人材を養成してきました。そ

して、1966（昭和41）年、文学部、外国語学部、外国語学部第二部の3学部9学科からなる男女共学の愛知県立大学として新たな出発を遂げることになります^[24]。

書影のそれぞれの号には赤々と「愛知縣立女子専門學校圖書之印」と押印されているが、戦後の早々に、近代中国の雑誌『語絲』の購入を決めたのは国文科の教師だったかそれとも図書館員であったか。或いは、中国に滞在（従軍？）経験のある愛知県の人士から寄贈されたものであったやもしれない。そこに如何なる歴史と想念が内在していたのか今では知るよしもないが、そこには戦前戦中の中国蔑視とは全く異なる新しい眼差しが注がれていたことだけは確かである。

*

北京、そして上海で刊行された『語絲』の出版には編集者の周作人、魯迅が深く関与していた可能性が高く、彼らは刊行の時々で文字の異同や誤りをチェックできた環境にあったと考えられる。版本による文字の違い、例えば冒頭に引く「野草・影的告别」の「往」と「住」は果たしてどちらが正しいのか？（最終的に「住」に落ち着くのは、1927年初版以降の『野草』“単行本”版本が一貫して「住」を採用することから判断できるが）、そうした未解明の問題も「版本」調査によって明らかになる可能性がある。従来全く顧みられることのなかった「版本」研究にも、一定の価値を認める所以である。

追記：本研究は、JSPS 科研費 20K00375 の助成を受けたものである。

注記

[1] 『魯迅全集 第2巻』（2005年、人民文学出版社）、169頁。

[2] 1965-1966年、株式会社大安〔東京〕発行。中国資料叢書4『語絲（影印）第1-12冊』。「大

安書店』は、1951年（創立）から1969年（廃業）まで、日本・中国の古典・学術図書の出版、販売を行った中国関係書店。時代の荒波に翻弄された会社の内実について綴ったものとして、大安書店とその後を継いだ燎原書店の副社長を務めた大山茂著『大安社史』（1998年、汲古書院）がある。

- [3] 『「野草・影的告别」考—“行く”か“留まる”か』『言語文化論究』（九州大学）第22号、2007年3月）。なお、拙稿では次のように結論を保留している。「小論では、諸説紛々たる「影的告别」の読みの可能性について、従来の研究に見落とされてきたテキストの問題を端緒として考察を試みた。初出誌『語絲』と単行本『野草』の間の“往”と“住”、わずか一画の相違は、実は極めて象徴的な意味を有している。“行く”か“留まる”かの問題は、逡巡する影のありようそのものなのだ。それはすなわち当時の魯迅自身の姿であった。」
- [4] 『語絲』創刊号（1924年11月17日、第一期）に「发刊词」が掲載されている。《知堂回想录》（一九七〇年五月、香港三育图书文具公司）「一四七 語絲の成立」に、次のようにある。「十一月二日、下午至市场开成北楼，同玄同伏园小峰川岛绍原颉刚诸人，议出小周刊事，定名曰语丝，大约十七日出版，晚八时散。（中略）周刊的发刊词是由我所拟的，但是手头没有语丝的原本，所以不能记得了。」
- 「发刊词全文：我们几个人发起这个周刊，并没有什么野心和奢望。我们只觉得现在中国的的生活太是枯燥，思想界太是沉闷，感到一种不愉快，想说几句话，所以创刊这张小报，作自由发表的地方。我们并不期望这于中国的的生活或思想上会有什么影响，不过姑且发表自己所要说的话，聊以消遣罢了。／我们并没有什么主义要宣传，对于政治经济问题也没有什么兴趣，我们所想做的只是想冲破一点中国的的生活和思想界的昏浊停滞的空气。我们个人的思想尽自不同，但对于一切专断与卑劣之反抗则没有差异。我们这个周刊的主张是提倡自由思想，独立判断，和美的生活。我们的力量弱小，或者不能有什么着实的表现，但我们总是向着这一方面努力。／这个周刊由我们几个人担任撰稿，我们所想说的话大抵在这里发表，但国内同志的助力也极欢迎。和我们辩驳的文字，倘若关于学理方面的，我们也愿掲載，至于主张上相反的议论则只好请其在别处发表，我们不能代为传布，虽然极愿加以研究和讨论。／周刊上的文字大抵以简短的感想和批评为主，但也兼采文艺创作以及关于文学美术和一般思想的介绍与研究，在得到学者的援助时也要发表学术上的重要论文。／我们唯一的奢望是，同志逐渐加多，文字和经济的供给逐渐稳固，使周刊成为三日报，二日报以至日报：此外并无什么私愿。或者力量不及，由周刊而退为两周刊或四周刊，以至于不刊，也说不定：这也是我们的预料之一。两者之中到底是那样呢，此刻有谁能够知道。现在也大可不必管它，我们还是来发刊这第一号罢。」
- [5] 引用は『語絲』原本に拠るが、『全集』収録は、『周作人散文全集 4』（2009年、廣西師範大学出版社）、97頁。
- [6] 『周作人散文全集』により算出。
- [7] 『木片集』収録。『周作人散文全集 12』（2009年、廣西師範大学出版社）、772頁。
- [8] 『魯迅博物館蔵 周作人日記（影印本）（中冊）』（1996年、大象出版社）、408頁。「下午往訪適之」の部分、前掲『《語絲》の回忆』（1957年発表）への引用では「下午至東安市場」に、「小峯 矛塵」は「川島」に書き換えられている。
- [9] 『魯迅博物館蔵 周作人日記（影印本）（中冊）』（1996年、大象出版社）、543頁。
- [10] 陳離『凝望与置身—语丝社与《语丝》周刊』（2020年、武漢出版社）、205頁。

- [11] 『知堂回想録』《知堂回想録》一九七〇年五月，香港三育图书文具公司。引用は、1980年10月版（450頁）による。
- [12] 例えば、夏寅『《語絲》体制之形成与北京的报刊出版——关于“同人杂志”与“小周刊”』，《中国现代文学研究丛刊（月刊）》2021年第5期、等。
- [13] 章廷谦（1901-1981年），字孛生，笔名川島，（浙江省绍兴市）上虞道墟镇人。15岁随父去太原，入第一中学就读，后入山西大学哲学系。民国8年（1919年），转入北京大学哲学系。1922年北大毕业，留校任校长办公室外交秘书，并兼哲学系助教，曾参与发起和编辑《語絲》，并长期为之撰稿，与鲁迅过从甚密。后任北京中俄大学教授。“三·一八”惨案后辞职。12月，至厦门，任厦门大学国学研究院出版部干事。次年，离闽赴杭，在国民党浙江省党部宣传部工作，并任杭州《民国日报》编辑。有1924年在北新书局出版的散文集《月夜》，古籍校本《游仙窟》（鲁迅写序）和《杂慕四种》。1949年后有《和鲁迅相处的日子》《川岛选集》。其散文幽默风趣，感情真挚，文笔优美，充分体现了“語絲文体”的风格特点。（引自「百度百科」）
- [14] 16开纸的宽度为185mm，长度为260mm。A4纸的宽度为210mm，长度为297mm。32开的常见尺寸是185mmx130mm。
- [15] 章川島の該文について、前掲陈离『凝望与置身——語絲社与《語絲》周刊』（118頁）は、次のように推断する。「1. 周作人主编（《語絲》第1-156期）章川島の回忆不会有多少夸大的成分，但正如他自己所说，鲁迅所做的这一切都还是属于“参加些意见”，这个时期《語絲》的主编是周作人，则是无疑的。（注：章川島在同一篇回忆文章中說：“就《語絲》创刊时的十六个长期撰稿者来说，当然由其中的鲁迅先生或周作人来主持最为适当。”但他接下来并未说实际到底是谁主持。《忆鲁迅先生和〈語絲〉》写于1956年，考虑到当时的文化语境，他的含糊其词并不难理解。）
- [16] 『和鲁迅相处的日子』（1958年7月初版、1981年5月第2版）、18頁。『鲁迅回忆录（散篇）上册』（1999年1月、北京出版社）、266頁。（※『鲁迅回忆录』には、原載『文芸報』など正確な情報あり）
- [17] 『鲁迅全集 12 书信（1927-1933）』（2005年、人民文学出版社）、69頁。
- [18] 原載『北京日報』1956年10月17日。『鲁迅回忆录（散篇）上册』（1999年1月、北京出版社）、77頁。
- [19] 『鲁迅回忆断片』上海杂志公司、1943年11月初版。『鲁迅回忆录（专著）上册』（1999年1月、北京出版社）、199頁。
- [20] 李小峰（1897 - 1971）：本名李荣第、字が小峰。晚峰とも書く。江蘇省江陰の人。新潮社および語絲社のメンバー。1923年北京大学哲学系卒業。孫伏園を通じて魯迅と交わる。1924年11月孫伏園とともに『語絲』週刊を创刊、翌年3月、魯迅の援助のもとに北新書局を創設、その主宰者となる。それで魯迅からよく「老板（社長）」と呼ばれた。1927年4月以後、李小峰は北新書局本店とともに上海に移動、魯迅も上海移住後、彼のために『語絲』と『奔流』の編集を担当した。1929年夏、魯迅は北新書局が長期に渡って支払われるべき印税の処理を怠ったため、法的な解決を求め、李小峰が人を通じて調停を要請し協定が結ばれた。以後も魯迅は同書局から『三閑集』『兩地書』『偽自由書』などを出版している。（青野繁治編「オンライン現代中国作家辞典」http://www.lang.osaka-u.ac.jp/~s_aono/zjcidian/zuojia2/1/li/xiaofeng/xiaofeng.htm）

- [21] 同 CiNii 上で『合訂本（北新書局 1925.8）』（「合訂本」の原本）とされていた、「名古屋大学情報・言語合同図書室」蔵本は、実際には「上海文芸出版社 1982 影印」版「合訂本」であった。筆者の訪問後の現在、CiNii 上の記載は訂正されている。
- [22] 「愛知県立大学」蔵本が「1 - 140 期」であることについて、第三章に引く魯迅の手紙「270919 致章廷謙」（注 17 参照）に“《语丝》的一四一、二两期，终于没有收到，大概没收了。”と書き付けることはやはり気になる。（待考）
- [23] 例えば注 10 にも引く、現代における『語絲』研究の最前線かつ最も豊富な内容を有する陳離著『凝望与置身—语丝社与《语丝》周刊』、36 頁。陳離は章廷謙の記す 16 名を挙げた後で、荆有麟、史贇の挙げる 16 名の名簿がかなり異なることを取り上げている。陳の文面から『語絲』原本には当たっていないと推察される。
- [24] 愛知県立大学 HP。https://daigakuic.jp/universiy_00023_contents_03_00593.html（2022 年 12 月 6 日参照。）